

農村と都市が共生する社会の構築

平田 克明 (ひらた かつあき/平田観光農園)

田舎の生活

私の住む上田町の地域おこしに、大阪・京都の大学生にボランティアで協力いただいている。

広島県上田町の第一印象を尋ねたら、学生たちは異口同音に「夜は暗くて怖い」。街灯が点っていないためである。私たちにとっては当り前の光景であり、何不自由なく生活している。田舎では、清みきった天空に、宝石を散りばめた如く星がキラキラと輝く。

一方、私が東京を訪れる時の羽田空港の上空から見下す不夜城のごとき光景は、信じ難い異様な世界に映る。

今年3月11日の大震災によって、電力不足が懸念され、東京では計画停電が実施された。当然のことながら、田舎に住む私達も、無為に過ごしていた生活態度を反省し、節電に努めた。

田舎が取り組む循環型社会の構築

田舎では今も薪や炭で暖を取り、お湯を沸かして入浴する家族も多い。さすがに、日常の煮炊に薪を使用する家庭は皆無となった。また、大半の家の屋根にソーラーの温水器が設置され、入浴の湯はもちろん、台所用水として周年利用している。

近年は、ゼロ金利の貯金に替え、屋上に設置した太陽光発電による売電を導入して、環境と経済性を加味した取組みが急速に進んでいる。我家では、現在、薪ストーブ新設の工事中である。チェンソーを購入して、山林整備をしながら、薪や炭を備蓄している。田舎に住む私達のささやかな取組みにすぎないが、一抹の空しさを禁じ得ない。

その理由は、中核市未満の中小市町村の人口比率は35%未満にすぎず、私達の行為は日本全体で見れば、微々たる効果といえる。

南米エクアドルのキチュア族の民話がある。

『山火事で森が燃えていました。虫や馬や動物達は、我れ先に逃げていきました。しかし、ハチドリだけは、くちばしで水を運んでは火の上に落して、行ったり来たりしています。ほかの動物たちは、それを見て「そんなことをしていったい何になるんだ」といって笑いました。ハチドリは答えました。「私は、私のできることをしているだけ。』

私は4月中旬に新宿を訪れ、以前とは全く違う異様に暗い街の姿に驚いた。都市に住む人達も、快適さは満喫できなくても我慢し、一旦緩急あれば眠っている日本人魂が目覚めて協力できることを知り、日本の未来に一縷の望みを持った。

日本民族が築きあげた貴重な遺産によって、我々は多くの恩恵を受け、豊かな生活を享受してきた。祖先の人達の血と汗の結晶である宝を、未来の子供達に伝承する責務が私達にはある。一人一人が地球環境を守るための行動を、「今」着実に実行することが何より重要である。

食料・水・緑は都市住民の課題

世界の人口は今年の10月に70億人を超える。1804年に10億人に達した人口は、155年後に30億人となり、さらに28年後に50億人、24年後に70億人と近年爆発的な増加を続けている。

地球上では、10億人がすでに飢餓に瀕する現状にある。人口一人当りの耕地面積は50年間で10アールと半減した。育種や技術革新で単位面積当りの2.5倍に増えたことで、今迄はなんとか凌いできた。

人口1億以上の11カ国中、穀物自給率100%以上は6カ国、80%以上が3カ国、その他メキシコが68%、唯一日本は28%にすぎない。

元フランスの大統領ドゴール氏は、「食料を自給できない国は独立国ではない」と喝破している。

私は、昨年の農政審議会に委員として参加し、今後5ヵ年間の農業基本計画を策定した。世界の食料にまつわる諸情勢に鑑み、日本の最も重要な戦略的政策として農地461万haを死守し、自給率50%を達成すると明記した。

最近、世界各地で頻発している干ばつ、洪水、暴風害、津波、冷害などが食料の安定供給に懸念を与え、さらには投機的な商材とさえなっている。

また、中国を筆頭にBRICsや東南アジアの国々の飛躍的な経済発展によって、肉や魚、乳製品を多く摂取する高質な食事内容となり、国際価格が逼迫する気配である。

一方、日本の生産現場は、農業従事者の平均年齢は65歳を越え、50歳以下が15%以下となっている。若者が就農しない最大の原因は、今迄の農業政策が、生産量のコントロールのみで経済性を無視した施策であったことに尽きる。従って、日本の農業所得は、1990年に6.1兆円であったものが、15年間で3.4兆円とほぼ半減している。

私共の集落の人口は210名で、高齢化率が56%、2003年に小学校が廃校となる。この町で最後と思われる子供が生まれたが、このままで推移すれば30年後の推定人口は50人となる。仮に、2年に1組若い夫婦が定住すれば、2040年の人口は、120人に留る。

私共の集落には、約100haの農地があるが、全て棚田で、基盤整備された面積は約20%にすぎず、年々耕作放棄地が増えている。加えて、近年、天敵のいないイノシシ、シカ、アナグマ等野獣が増え、防護柵で囲わなければ栽培ができない状況になってきた。そのうえ、過去に70歳代の2名が農機具事故で尊い命を失っている。

農村と都市が共生する社会の構築

私が就農した最大の目的は、若者が農村に定住

するためには、どのような環境が必要であるか実験することであった。そして、私が脱サラUターンで農業を始めるに当たり、4つの経営理念を決めた。

- (1) 四季を通じて美しい景観があり癒やされる農園創り
- (2) 時代の流れに対応した新しい農業の創造で若者が魅力の持てる農業のモデルを創る
- (3) 農業・農村の若い担い手の育成道場づくり
- (4) 社員の夢を実現し、生きがいを持って働ける快適な職場の創造

現在、農園の常勤社員は、4年生大学を卒業した20~30歳代の都会育ちの若者が大半を占める。出身は商社、農林水産省、種苗会社、テーマパークなど様々である。社員は、部門担当制で、生産、加工、販売を総て担い、企画を提案し、時代に対応し斬新で独自の商品化を画っている。

しかし、最も大切なことは、環境に配慮しつつ顧客満足度を最高に高めることである。

その結果、現在社内結婚で5組が独立して、立派な農業経営を続けている。研修生も外国人を含め200人以上を受け入れ、果物栽培、観光農業、果実加工と国内外で活躍している。

当農園の観光客も年間20万人となり、三次市の観光客の過去20年間の伸び率は5.1倍で、県で1位となった。

近年、当社のマスコミの露出度も増え、外国人観光客や企業のイベントも多くなるなど、永年かかって築いた自然環境を大切にしたい平田観光農園ブランドがようやく認知され始めたと感じている。今、陶芸作家、大学教授、Uターン等の上田町への定住も予定され、私共が目論む交流から定住への動きが始まりつつあると予感している。

農村に住む私達は自然豊かな環境に住み、食料は地産地消で、清浄な水を飲み、将来とも何ら生活に困ることはない。今、TPPの是非が論じられているが、環境や食料問題は、消費者が考えるべき課題であることを最後に記す。